説教20210725 エフェソ4：1-7，11-16　マルコ6：45-52

「心が鈍くなっていた」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

今日の説教題は「心が鈍くなっていた」ですが、もとのギリシャ語に忠実に訳すと「心がかたくなになっていた」となります。人間の心がかたくなになっている状態を、聖書はしばしば戒めています。例えば主なる神は申命記で「心の包皮を切り捨てよ。二度とかたくなになってはならない」と、人々に戒めを与えられています。かたくなになってはならない、かたくなになってはならない、という主の戒めを、私たちはある意味、かたくなに守り続けて行きたいと願います。なぜ、そんなに、主なる神は私たちのかたくなさを戒められるのか、といいますと、それはかたくなであると、私たちは主からの恵みを受けとることが出来ないからです。弟子たちは先週のパンの出来事で、実はイエス様から恵みを受けることが出来ませんでした。なぜならマルコ6章 52節にあるように「パンの出来事を理解」出来なかったからです。パンの出来事を理解するとは、どういうことでしょうか、それはイエス様が全ての人を恵まれようとされていることを知り、そして私たちがそのためにイエス様と共に祈り、イエス様に用いられ働くことを喜びとする、ということでしょう。

　さて、牧師館で暮らしていますと、たまに、3日３晩飲まず食わずです、といった方が突然チャイムを鳴らして訪問してこられます。そんなときは、ありあわせの粗食で、食事を共にすることもあるのですが、その方は、本当においしそうに出された食事を平らげるんですね。食事の美味しさは、それが豪華であるかどうかよりも、各自の腹のすき具合のほうに余程依存していると思わされます。私も、こんな粗食でこんなに喜んでもらえたら楽勝だ、とは思いませんがお安い御用だと思って、その方の喜んでる顔を見るだけでうれしくなります。

　今の私の体験談はごくありふれた話で、皆さんに受け入れやすい話だと思います。そして、先週の５千人に食べ物を給仕した、弟子たちも同様に、群衆の喜ぶ顔を見て、うれしかった、と私たちは勝手に想像してしまうと思います。ところが、先週のお話はそんなにありきたりの美談ではないのです。それどころか弟子たちは「パンの出来事を理解」せず、心がかたくなになってしまい、その状態が今日の聖書箇所にまで続いているのです。それは決してよい心の健康状態ではありません。なぜ、弟子たちは群衆と共に喜べなかったのか。そのことを考えると、私たちは人間が抱える根源的な罪に思いを致さざるを得ないでしょう。その私たち人間の抱える罪を、分かりやすく言えば、次のように言えるでしょう。私たちは、イエス様の奇跡が自分には与えられず、ほかの人に与えられた時、主よどうしてですか、と言って、納得出来ない感情を抱いてしまうことです。

先週、弟子たちは自分たちが食べる為に、５個のパンと２匹の魚をすでに確保していました。ですから、この時イエス様の祈りによって、このパンと魚を増やされたイエス様の奇跡は、弟子たちにとって、全く自分たちの為の奇跡ではなく、自分たち以外の人たちの為の奇跡だったと、弟子たちは理解したことでしょう。しかしそれは全く弟子たちの誤解であって、弟子たち自身も食事に預かっている訳ですし、そのうえ、１２のかごいっぱいものお土産をももらっているのですから、それでなぜこの恵みを素直に喜べないのか、といささか不思議に思われることでしょう。

この時、弟子たちはかたくなに自らの道を歩み始めていました。自分たちだけで食べるための食料を確保し、生き延びていこうとするその道は、確実で安全であるように見えますし、また将来を保証する道の様にも見えます。しかし、その道を歩み始めた弟子たちには、５千人がやってきて、全員にイエス様の恵みが与えらるなどという出来事は、全く想定外で、余計なことで、自分たちの計画からは外れたことだったのです。この時の弟子たちの心境を黙想していきますと、お土産を持たされても素直に喜べないその姿が思い浮かんでくるのではないでしょうか。

私たちは、イエス様が私たちの為に奇跡を起こしてくれれば、ますます私たちの喜びは増してくる、と単純に考えがちですが、実はそうではないようです。そのことは福音書を読んでも明らかでしょう。イエス様はその地上生涯で多くの奇跡を人々に対してなさいましたが、結局、その奇跡によって人々が救われたのではなくて、そののち、イエス様が十字架につけられ、流された血によって贖われ罪赦される迄は、まことの救いは人々に訪れることはなかったのです。

今日の聖書箇所に入りますが、マルコ福音書6章45節「それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間に御自分は群衆を解散させられた。」

イエス様は弟子たちを強いて舟に載せられました。その時イエス様は弟子たちと距離を置きたかったのでしょう。イエス様にとっても、この時の弟子たちのかたくなさは思いの他だったのかもしれません。イエス様は一人で祈るために山にいかれました。そして、そんな弟子たちのことも覚えて、真剣に父なる神に祈りをささげたことでありましょう。

ところが、湖上の真ん中で、弟子たちが逆風の為に、先へ勧めなくなり立ち往生していることがイエス様には見えました。イエス様は、湖上を歩いて弟子たちのところへ行き、そばを通り過ぎようとされました。イエス様はそうして弟子たちが自分に助けを求めることを待っておられたのでしょう。ところが、弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。というのです。

イエス様は神様なので奇跡的に湖上を歩かれるのはあたりまえ、そのイエス様にすがれば大丈夫、という、神の目から見た成り行きを弟子たちはこの時見通すことが出来ませんでした。あくまで、人間的な処世術で固まっていた弟子たちは、湖上を歩くイエス様の姿も人間のまなざしでしか見ることが出来なかったのです。ですからこの時「幽霊だ」と大声で叫んだ弟子たちの心境も察しがついてくることでしょう。

この幽霊、という言葉は新約聖書中、ここでしか使われていません。イエス様に対して「幽霊だ」と叫ぶのは、まさにイエス様を信じていないことを暴露するような、情けない物言いであります。弟子たちのこの時の信仰は、自分たちの為だけの食料を確保し生き延びていく、といったごくありふれた人間的な計画をきっかけにして、大いに揺らいでしまっていたと言わざるを得ないでしょう。

さて、人間はイエス様の奇跡をただ喜ぶばかりではないということを話してきましたが、そのことはパウロの話をすればもっとはっきりすることでしょう。パウロは、イエスと地上で行動を共にした弟子たちと同じ年代の人だったので、この５千人の給食の奇跡の時も、別の地方で活躍していたはずです。しかし、パウロはファリサイ派に属していましたので、うわさに聞くイエス様の奇跡のことを、喜ぶどころか、全く苦々しく思っていたはずです。パウロは、イエス様の奇跡によって群衆が喜ばされ、自分たちファリサイ派が打ち立てていた社会秩序が乱されるのを嫌がっていました。ファリサイ派であるパウロは、この時イエス様とその一派を迫害していました。パウロの目から見れば、イエス様がなされた数々の奇跡は、どれをとっても破壊的行為に移ったことでしょう。パウロは、たとえイエス様が人々をよみがえらせる奇跡を見せられたとしても、それゆえにイエス様をなきものとしようといきり立ったことでありましょう。

私たちは今日、５千人の給食の時の弟子たちとパウロとに共通して見られる、人間的な計画に踏み従っていくことの愚かさや危険性を思い知らされたことでしょう。そしてその様な人間的な計画とは、今の世の中の隅々にまで普通に見られることであります。日常的なことでいえば、私たちは、人生をせいぜい、自分たちと子供たちという狭い家族の領域でしか計画できなくなり、また、国家的には、国家間の利害の調整の為に利用されるだけのイベントの開催など、実に神様の計画を排除していくような、人間的な計画が横行するようになりました。

パウロがそのかたくなさから解き放たれ、神の計画に従うものとされるには、パウロがイエスキリストの十字架の血によってあがなわれ、打ち砕かれて、かたくなさの罪から解き放たれることが必要でした。今日読まれましたエフェソの信徒への手紙で「むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます。」とパウロがその口を通して御言葉を語れるようになったのは、全くパウロ自身の努力によることではないと思わされます。

湖上でイエス様のことを「幽霊だ」と言ってしまった弟子たちのことを思いますと、彼らは、はじめは、自分たちが食べていくために、ささやかな食料を確保したに過ぎません。きっかけはそんな些細なことではあっても、イエス様と共に歩み、イエス様の思いや行いや奇跡のことを誤解するようになってくると、彼らは、全く、イエス様のことを信じられないという境地まで行きついてしまったのです。もちろん、彼らとイエス様との歩みはそこで終わりなのではなく、このことも彼らの信仰が深まっていく一つのステップとなったのには違いありません。

ただし、人間誰もが陥ってしまう、かたくなさという罪には、私たちは十分留意する必要があることでしょう。私たちは、かたくなであるとき、イエス様の言葉を新たに受け取ることが出来なくされるでしょう。そして私たちのかなくなさを打ち砕いてくれるのもまた、イエス様であり、イエス様の御言葉であります。イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは、心の中で非常に驚いた、とありますが、弟子たちはこの心の中の驚きを、イエス様に悟られたくなかったのかもしれません。マルコ福音書の４章で、風を叱って風を静まらせたイエス様のことが記されていますが、それと比較しますと、このときのイエス様の企図は、明らかに、弟子たちのほうへ向けられています。弟子たちは自分たちに内在するかたくなさという罪を、イエス様に見透かされて、驚いてしまったのかもしれません。

私たちは信仰の模範であるパウロの口による御言葉の数々に教えられ、信仰の励ましを得ることでしょう。しかし、そのパウロも全ての人と同様に、人間的なかたくなさの罪に支配されうるものであります。パウロも日々、十字架のキリストのあがないをおもいつつ、打ち砕かれる生活をしていたのでしょう。私たちもその様な、キリストによってかなくなさを打ち砕かれる日々をこれからも続けてまいりたいと願います。

お祈りいたします

天の父

私たちは、湖の上で方角を見失い、彷徨っているよるべないものです。その様な私たちが偽りの確かさに執着することなく、みこイエスキリストにより頼むことができるように私たちを日々、新たにしてください。みこによって守られ日々を歩む私たちが、あなたの為に喜んで働き、献身する者となれますように。

　この世の華やかさや喧噪の中で、見過ごしにされている多くの飢餓に苦しむ方々がおられます、どうか私たちが今一度自分のかたくなな心を、見前に打ち砕かれ、まことにあなたの為に働き歩む方向を見定めさせてください。

　主よ、この世の闇を照らし、豊かな憐れみをもって、この世の危険をことごとく防いでください。私たちを光のうちに、ともに働かせ、また安らかな眠りをお与えくださいますように。

父と聖霊と